

いつもとは 違う空気の国技館
～平成 28 年 5 月場所観戦メモ～

< 1 > はじめに

この場所の賜杯争いを中心に見ると大変面白い場所だった。通常の場所だと優勝争いに平幕の力士が一人か二人紛れ込んでいることが多いのだが、今場所は様子が違っていった。10 日目を過ぎると横綱・大関だけで先頭を走るようになり、日を追うごとに直接対決で一人ずつ脱落していくという面白い展開になった。折角の面白い展開にも関わらず、相撲協会（審判部）の無芸さが光った。白鵬・稀勢の里の一騎打ちの様相となったにもかかわらず、両者を機械的に 12 日目に対決させてしまったために以降の興味が半減した。千秋楽結びの一番にこの対戦を組めば、もっと面白い展開になり集客力にも影響が及んだに違いない。興業としての工夫が足りないと強く感じた。

黒星数別人数分布の推移を下表に示してみた。(赤字=優勝決定)

	5 日目	中日	10 日目	11 日目	12 日目	13 日目	14 日目	千秋楽
無敗	3 人	白鵬 稀勢の里	白鵬 稀勢の里	白鵬 稀勢の里	白鵬 稀勢の里	白鵬	白鵬	白鵬
1 敗	8 人	豪栄道 日馬富士				稀勢の里		
2 敗	11 人	鶴竜 栃ノ心 栃煌山 御嶽海 遠藤	鶴竜 日馬富士	鶴竜 日馬富士	日馬富士		稀勢の里	稀勢の里

< 2 > 白鵬 37 回目の優勝

白鵬は中日までは淡々と相撲をとっていたが、ふと気が付くと稀勢の里がなかなか離れない。しかも時折控席から稀勢の里の相撲を見ては何かを感じていたに違いない。

いつもならば脱落していく筈の稀勢の里が腰にぴったりと食いついたままで離れないので、日に日に緊張感を増していったことだろうと思う。仕切りの最中の形相にそれがうかがえた。

攻撃相撲の腕前もさることながら、相手の出方に応じて素早く柔軟に対応できる能力はさすがである。

生涯戦歴 987 勝 202 敗 33 休、幕内戦歴 893 勝 154 敗 33 休、通算 1,000 勝達成の日は近い。

おまけに、先場所の初日に敗れた後二日目から無敗で来ており、現在 29 連勝中。まさか 44 連勝ということはないと思うが・・・・。

< 3 > 稀勢の里を称えよ

マスコミはおろか相撲協会までが「綱取りだ！綱取りだ！」と騒ぎ立てる。そしてあたかも大失態を演じたかのような騒ぎぶりで敗戦にコメントを付けまくる。少々異常さを感じた 15 日間だった。

今場所の稀勢の里の相撲には、過剰な気合いが入らず、攻められても相手の動きを良く見て落ちついて対応して、勝機をつかむと力強く攻めて勝つという形が見えた。相変わらず腰高で見ているとハラハラするような場面が散見したが、自信を持って相撲を取っていることと、常に相手を正面に置いて前進圧力を持って攻めて行く、相手の動きを良く見て冷静に判断して相撲を取っていることなどでそれがカバーされており、進歩が感じられた。

全勝の横綱にぴったり付いて行き、一横綱三大関に勝った 13 勝 2 敗は大いに称えるべき成績だと思う。今場所の勝敗の推移を見るように、現役の大関の中では抜きんでているし、横綱との間の力の差はさほどの

開きではなくなっていることは事実であろう。ただ、大きく立ちほだかった白鵬だけはどうすることもできないというのが印象である。

現在抱えている最大の問題点である「腰高」は、白鵬攻略の大きな妨げになっていると思われるが、これは一朝一夕に変えられるものではない。腰高である上にさらに差し手も上手も取る位置が深いので、対白鵬戦では不利になって来る。前みつ取りや頭をつけることなどで「腰高でも勝てる相撲」の模索が必要かもしれない。来場所も活躍を期待したい。

< 4 > 活躍が目立った力士たち

ブラジル出身の小結魁聖は8勝7敗と一点の勝ち越しで、小結の座を守った。外国人特有の足の長さや腰の高さは稀勢の里と同じような課題を持っているが、きちんと両手を付いた立ち合いが美しい。先場所あたりから前傾姿勢を保って常に相手に向かって前進しながら何かをしていく相撲が見え始めた。今場所はそうした相撲がかなり目立ち好結果を生んだ。

栃ノ心は膝の大怪我で幕下まで陥落してしまったが見事に復活して、怪我をする前の地位まで戻ってきたのが数場所前のこと。右四つの型を持っており、腕力が強いので引き付けると相手が浮き上がってしまい何もできなくなる。投げに拘らず、寄り身に吊りを加えた今場所は前頭4枚目で10勝5敗の好成績を収めた。まだ大銀杏が結えない御嶽海が入幕後四場所目の今場所、前頭8枚目で11勝4敗を上げたのは評価に値する。美しい立ち合い、低い姿勢からの攻め、突き押しを中心としたの展開、その中で勝機を見出していく。身長178cmは大型力士が多い時代では小さい内に入る力士だが、おっつけ・はず押しがきれいにできる基本が習得できている若手のようだ。横綱・大関と当たる地位になる来場所が楽しみである。

遠藤は元通りの相撲に戻ってきた。まわしには拘らず、低い姿勢を維持しながら前に圧力をかけ続けて行き、突き押しで勝負を決めることもあれば展開の中でまわしをとって寄りに行くこともある。怪我で陥落した十両から一場所で復帰したとはいえ、幕尻の地位は危機感もあったことと思うが、淡々と自分の相撲を貫き11勝4敗を上げた。

< 5 > 世代交代か

正代・大翔丸・大栄翔・錦木・御嶽海・英乃海などの新しい顔ぶれが幕内中位から下位に名を連ねて来た。さらにその少し前の世代である遠藤・千代鳳も加えると、次をうかがう若者たちが出そろって来た感がある。まだまだ粗削りの力士が多いが、ここ数場所の中で誰が抜け出してくるのか楽しみになってきた。

十両の土俵も新しい力が加わったことで面白くなってきている。今場所千代の国との優勝争いに食いついた佐藤や朝弁慶・宇良・天風・剣翔など今後の活躍が期待できそうな力士が増えて来た。

幕内から陥落した力士が多くなりすぎると十両の土俵は活力を失うが、このところ新しく上がってくる若い力と陥落組とが適度に混じり合い、面白くなってきている。

安美錦・豪風などのベテランの活躍も面白いが、若い力が加わって一番一番の勝負がさらに興味深いものになってきている。発展的な意味での世代交代が進んできている感じがする。

< 6 > 立ち合いの正常化

場所前に全力士を集めて「立ち合いの正常化」に向けた研修が行われた。そして場所中に「手つき不十分」の立ち合いに対して行司または審判長から「待った」がかかり「立ち合い不成立」となり、やり直す場面が数多く見られた。相撲協会の新体制の中で行われている施策のひとつのようで、大変良いことだと思うが、いくつかの問題もあるように感じた。

東西のいずれかの力士に「手つき不十分」があった場合、テレビで見ているとズームアップされているので様子が良くわかるが、国技館で観戦しているお客さんにはその様子が解らない。「なぜ待ったがかかって立ち合いのやり直しをすることになったのか？」はたまた「何故やりなおしているんだろう？」が解らず館内にとよめきだけが走る。

この場合、審判長から「只今の立ち合い不成立について説明・・・」として、「東方の力士XX山が手を付い

ていなかったため・・・」と観客向けに説明をする必要があるのではないか。そうすることによって、「手つき不充分の力士の名前」が公表され、常習者は改善せざるを得なくなる。

テレビで見ていると、特定力士により立ち合いが乱されていることは明白な感じがするので・・・。

何よりも原点がきっちりしていないことが事の改善策に繋がらない背景になっていることを認識すべきではないかと考える。

「① 蹲踞の姿勢で相手と対峙した後、②深く腰を下して、③両手を付いてから ④立ち上がる」という明確な取り決めがないことが原因となっている。

「両手を付いて立ち上がる」「片手を付いて、機を見てもう一つの手を付いて立ち上がる」

「片手を付いて、もう一つの手はチョン付き」「両手ともに土俵を撫でるだけのチョン付き」など、力士によって様々な立ち合いの方法が存在し、それを容認している。

②の動作で「深く腰を下さず」に、いつまでも体を揺さぶり続けている栃煌山・千代鳳などの力士、中腰のまま立ち合い動作に入ってしまう碧山ほか何人かの力士、

③の動作で「チョン付き」しかない琴奨菊・松鳳山を始めとした数多くの力士、

この点を改善して「立ち合い基準の明確化」を図らなければいつになっても解決できないと思う。

解説の北の富士さんが興味深い発言をしていた。「我々が現役の頃には手をつかない立ち合いが許されていたので、今立ち合いの問題について厳しいことをコメントするのは難しい」。

「立ち合いの正常化」を本気で目指すのなら、「立ち合いの標準化・基準の明確化」を先に進めなければならないことをいつ認識するかにかかっているような気がする。

以上